

全電源喪失の記憶

証言 福島第一原発

■第4章「東電の敗北」

3月15日未明、東京電力福島第一

原発免震重要棟の緊急時対策本部は

異様な静けさで包まれていた。2号

機格納容器の圧力が上昇し、ベント

ができないまま時間だけが過ぎてい

った。打つ手がなくなり、対策本部

内の誰も口を開こうとしないのだ。

テレビ会議で時折、本店の担当者

が原子炉水位、圧力、格納容器圧力

を知らせるよう対策本部に促す声が

大きく響いた。

「ドライウェル(格納容器)圧

下がりません」。このやりとりは何

回も繰り返されていった。

中央の田卓に座っていた所長の吉

田昌郎(56)が突然立ち上がり、

東京電力福島第一原発事故で

15

俺と死んでくれるか



福島第一原発で記者団の質問に答える吉田昌郎所長(中央)

＝2011年7月12日

らふいと突き出した。

「もう駄目だ…。もうつらい

ていた。

第1復旧班長の稲垣武之(47)は心

底驚いた。吉田からそんな弱気な言

葉が出るとは思っていなかったの

だ。吉田はしばらく歩き回ると再び

いすに腰を下ろした。背もたれに身

を預け、腕みをする目をつ閉じた。

どれぐらいそうしていただろう

か。第2復旧班長奥田史朗(56)の目

の前で、吉田の大きな体がいすから

ずるると滑り落ちた。奥田には崩

れた「まっに見えた。

だが実際には崩れたのではなく、

た。吉田は床にあぐらをかき、目を

閉じて何かを考えているようだ。

た。吉田は数分間、そのまま動か

なかった。

最後の最後、俺と一緒に死ぬのは

放射性物質が放出されれば、免震棟内

も間違ひなく汚染される。ここには

まだ約70人がいて、その中には

女性もいるのだ。

「10人ぐらいだったか。昔から知

るやろ。こいつらだったら死ん

でくれるかな」と

ただ、その前に…

吉田はいすに戻ると、第2発電班

「パニックにならないようにな

言い方、気を付けてよ」

「はい」

吉田の目を見つめたまま、国頭は

答えた。

だが旧知の部下たちを残しても、

できることは、もう大してない。た

だ祈るだけだと吉田は思っていた。

起きているやつだけでいいから、ち

やんと準備するよつに言って回れ」

同通信 高橋秀樹)

第4章おわり

辺の避難区域の状況を撮影

京都市の同志社大で3月11日から開

東大発人口ホ 決勝辞退

米国競技会 商用に集中

災害現場の活動を想定し

た米国のロボット競技会

で、予選を首位で通過した

東京大発人口ホ「SC

HART(シヤフト)の

チームが、来年の決勝への

参加を辞退したことが29日

までに、分かった。

競技会を主催する米国防

総省の国防高等研究計画局

(DARPA)が発表した。

DARPAは「シヤフト

の辞退は)商用製品の開発

に集中するため」と説明し

ている。

シヤフトは東大のロボッ

ト研究者らが設立。イシタ

トネット検査大手グループ

に買収され、傘下にある。